

星を見る二つの眼

去る二月三日、宇宙探査機「はやぶさ2」の打ち上げ見事に成功し、長い宇宙への旅に出た。「はやぶさ2」の打ち上げ成功のニュースが大きく注目された背景には、「はやぶさ」初号機の存在が大きい。数々の困難を乗り越え、小惑星「イトカワ」から微粒子を持ち帰ることに成功した物語は、複数の映画にもなったほどだ。

この小惑星「イトカワ」は宇宙開発の父、糸川英夫博士（一九二二―一九九九）の名前にちなんで命名されている。糸川英夫博士は戦闘機からペンシルロケット開発を経て日本のロケット工学の端緒を開いた科学者である。が、私が最初に知った糸川英夫博士の顔は科学者ではなく、驚くなかれ、「占星術師」のそれであったのだ。糸川博士は実に幅広い多趣味な教養人だったようだ。バレエを踊り、バイオリンまで自作されたことはよく知られている。そして博士は日本のコンピュータ占星術、一般向けホロスコープ占星術の父でもある。博士は一九七九年に『糸川英夫の細密占星術』を上梓、ベストセラーに。単純な二星座占い本ではない。従来は複雑な計算手続きが必要だったホロスコープ作成を簡単にできるようにした手引きで、かなり本格的な本だ。当時

一歳だった僕が最初にホロスコープを作ったのはじつにこの本によったのであったのである。

じつに奇妙だ。なぜ科学者が占星術の啓蒙を？コペルニクスやガリレオ、ケプラーが占星術に真剣に取り組んでいたが、これはいわゆる科学革命の渦中のこと。占星術と天文学が未だ未分化な面があった時代のことだ。二〇世紀とは話が違ふ。科学教育の視点からすれば占星術は時代遅れの迷信であり、悪くすれば「敵」ですらある。実際R・ドーキンスなどは反占星術のキャンペーンの急先鋒だ。科学者、糸川博士が占星術を「啓蒙」しようとしたのは単なるジョークだったのか、あるいは惑星軌道計算の面白い応用例としての遊びなのか、はたまた、どこかで「信じて」おられたのか。私には知る術もない。

だが、考えてみれば人は誰しもこのような矛盾を抱えているものではないだろうか。文字通りにも象徴的にも人には二つの眼があると私は思う。一つの眼は星を理性の目で客体として見る。そしてもう一つの眼は星を我が身の希望や不安の体現として主観的に見る。そしてこの人間のもつ矛盾や複雑さは、私にとって宇宙の起源にも劣らぬ魅力的な謎で有り続けている。

鏡 リユウジ

プロフィール
1968年京都生まれ。占星術研究者、翻訳家。国際基督教大学大学院修士課程修了。平安女学院大学、京都文教大学客員教授。日本トランスパーソナル学会理事。10代の頃よりさまざまなメディアで、「占い」をテーマに執筆。幅広い層から支持を受け、従来の占いのイメージを一新。主な著書に『占星術思想』（青土社）、『訳書にジェイムス・ヒルマン『魂のコード』（河出書房新社）、『マギー・ハイド『ユングと占星術』（青土社）、『ニコラス・キャンピオン『世界史と西洋占星術』（柏書房）ほか多数。

月刊 みんぱく

2月号目次

- | | |
|---|---|
| <p>1 エッセイ 千字文 星を見る二つの眼 鏡 リユウジ</p> <p>特集 地球人が宇宙人になるとき</p> <p>2 宇宙人類学の挑戦 ——人類社会と人類学のあらたな可能性を求めて 岡田 浩樹</p> <p>4 火星ミッション要員の条件 秋山 豊寛</p> <p>5 宇宙農業 イモ尽くし 山下 雅道</p> <p>7 宇宙から電波で電力を送る 橋本 弘藏</p> <p>8 高次元宇宙はあるか？ 村田 次郎</p> <p>10 集めてみました世界の〇〇 手袋編 佐々木 史郎</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 文化遺産おもてうら 無形文化遺産と音楽研究 福岡 正太</p> <p>16 多文化をあきなう 新潟の多様な小売店 石附 さゆみ、子島 進</p> <p>18 味の根っこ チーイリチャー 呉屋 淳子</p> <p>20 人間学のキーワード 再分配 浜田 明範</p> <p>21 異聞逸聞 山奥で飲んで食う人たち 吉岡 乾</p> <p>22 制服の世界、世界の制服 見常者がほしくなるような白杖を 広瀬 浩二郎</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|---|---|